

炎のメモリアル

2005(平成17)年3月30日鑑賞(東宝東和試写室)

★★★★



監督=ジェイ・ラッセル/出演=ホアキン・フェニックス/ジョン・トラボルタ/ジャシнда・バレット/ロバート・パトリック/ジェイ・ヘルナンデス/モリス・チェスナット/バルサザール・ゲティ/ビリー・バーク (東宝東和配給/2004年アメリカ映画/116分)

……2001年9月11日の同時多発テロの現場における英雄的な活躍で、一躍全世界から注目された消防士たち。この映画はそんなアメリカの消防士たちの「人のために働く」ことの意義と、そこから生まれる感動を真正面から描くもの。単純な筋書きながらも観客の心を打つこと請け合い。やっぱり映画は単純でわかりやすい感動モノが一番！

9・11テロで俄然注目されたアメリカの消防士！

2001年9月11日、同時多発テロが発生した。この9・11テロにおけるワールドトレードセンター（WTC）ビルへのジェット機突入の映像は、全世界の人々に一瞬「これはドラマか現実か？」と思わせるに十分なものだった。この同時多発テロは、イラク戦争の勃発、フセイン政権の崩壊へとつながり、それまでの世界秩序を根底から変えていった。このWTCビルへのジェット機突入の後、現場にかけつけたジョージ・ブッシュ大統領が肩を抱き合う姿を見せて全世界に印象づけたのは、現場での救出活動に果敢に従事したアメリカの消防士たち。この映画は、このシーンによって有名になったアメリカ消防士の姿を真正面から描くために企画されたもの。したがって、この映画に登場する消防士たちの姿は、あの9・11テロの後、テレビで何回も見た消防士の姿と全く同じ……。

冒頭のハイライトシーンとこの映画のつくり方

冒頭のシーンは、主人公のジャック・モリソンが大規模な火災現場で12階から

1人の生存者をロープで救出した後、大爆発によって数階下に落下するまでの約10分間。当然これによってジャックは死亡したものと思っていると、映画というのは便利な芸術。ここからジャックの新入り時代の回想シーンが開始され、1つの物語ごとにジャックの回想シーンをまとめながら、また、瀕死の危機的状況から何とか脱出しようと試みるジャックの姿へと場面を転換させていく。このつくり方を見ればそれだけで、この映画の「結末」は大体予想がつくもの。そして映画はその予想どおり、順調に(?)推移していくが……。

主人公はあの……？

この映画の主人公ジャック・モリソンを演じるのはホアキン・フェニックス。どこかで見た顔だと思いつつ思い出せないでいたが、パンフレットを読んでやっとわかった。そう、ラッセル・クロウ主演の『グラディエーター』(00年)で、あの、いけ好かない(?)皇帝コモドゥスを演じていた役者だ。彼はさらにシャマラン監督の『サイン』(02年)や『ヴィレッジ』(04年)にも主演している。1974年生まれだから、今31歳。私には決してハンサムな顔立ちとは思えないが、この映画では新入りの消防士から殉職(?)するまでの10年間を演じているが、その演技力は立派なもの。すなわちこの映画で見せる彼の姿は、

- ①人を救うための仕事である消防士の仕事を純粋に愛し、かつ誇りに思っている独身男の姿
- ②愛する妻から、テレビの画面で危険な目にあっている夫の姿を見るのは耐えられないと泣きつかれて戸惑う夫の姿
- ③消防活動でケガをした姿について子供から質問された時、誇りを持って消防士の仕事を子供に説明する父親の姿
- ④消防士としての長い活動の中でたくさんの同僚の命を失って動揺し、自分の仕事を誇りに思うということに自信を失っていく、仕事人間としての姿
そして
- ⑤必死に生き残ろうとしながら、最後に、これ以上仲間を危険にさらす救助活動を中止するよう伝える決断力ある男の姿

だが、彼はこれらの男の姿を実に説得力をもって演じている。

存在感あるジョン・トラボルタの演技

ボルティモアの消防署に配属された新米のジャックがあいさつに向かったのは、マイク・ケネディ署長（ジョン・トラボルタ）の部屋。ケネディ署長はデスクにいたものの、大イビキをかき、上着こそ着ていたが下はトランクス姿という異形……。こんなケネディの姿にジャックはびっくりしたが、署員の彼に対する評価は上々。それは、その後のケネディの現場でのキビキビとしかつ責任感あふれる指揮ぶりを見れば明らか。ジャックが消防士として立派に成長できたのは、本人の心構えもさることながら、こんな立派な上司に恵まれたことが大きな要因。

消防士は体育会系の世界！

ジャックの成長を支えたもう1つは、ジャックの仲間たち。もちろん職場の中には気の合うヤツもいれば、気の合わないヤツがいるのは当然。しかしこの映画はややこしいストーリーを排除して、ひたすら消防士の世界をわかりやすく観客に見せようとする意図は明らか。そのため気の合わないヤツは1人だけにとどめ、それ以外はたくさんの個性的な男たちがジャックの仲間として登場する。ジャックの成長がこれらの仲間との交流の中で可能となったことは明らか。この映画を観ていると、体育会的な男の仲間もいいものだと思えてくるはず……。

消防士は危険な仕事！

消防士にはポンプ隊とラダー隊（ハシゴ車隊）がある。当然新米のジャックは当初ポンプ隊に配属されたが、人命救助活動に直接従事するのはラダー隊。これは、ポンプ隊が放水を開始する前に燃えさかる建物に飛び込み、生存者を救出することが任務だから、危険この上ないことは明らか。したがってストーリー展開の中、ラダー隊に所属するジャックの親友のデニスが火災現場で殉死。さらにジャックの仲間であるトミーも顔面に瀕死の大火傷を……。

果たしてこんな危険な消防士の仕事をジャックはなぜ選んだのか、そしてデニスが殉職した後、ジャックはなぜあえてラダー隊の仕事を希望したのか？ さらにまたジャックの気持はその後何の変化もなかったのか？ それがこの映画のテ

ーマ。さてあなたはそれをどのように考えるだろうか？

攻めか守りか？

新米時代や独身時代のジャックはいとも簡単に「人命救助のため」という言葉を語っていた。親友のデニスと一緒にいったスーパーで、ナンパ気分半分でゲットした美しい娘リンダ（ジャシンダ・バレット）とのデートでも、ジャックは何の迷いもなく自信を持って同じ言葉を語っていた。そして、デニスの死亡後ポンプ隊からラダー隊への配置換えを希望し、火災現場から見事1人の男を救助したジャックは有頂天に……。

しかしこんなジャックと結婚し、お腹に子供を宿していた妻のリンダは、「あなたが死んだら私たちはどうなるの……？」と訴えた。そしてさらにトミーの大火傷。そんな中、ジャックの様子を心配するケネディ署長から「今でもこの仕事が好きか？」と問いかけられたジャックは、生まれてはじめてすぐに「YES」と答えられない自分の姿に戸惑わざるをえなかった。

男女を問わず、人生のある時点において、「攻めるのか守るのか」は誰もが自問自答するテーマ。そんな悩ましくかつ重要なテーマをこの映画は実にうまくシンプルに浮かび上がらせている。消防局本部に栄転するケネディ署長から、消防局本部でのデスクワークの仕事に推薦してもいいと言われたジャックは、さてどんな選択をするのだろうか……？

人のために働くという言葉の意味は？

この映画は「人命救助」のために働く消防士を主人公とした映画であり、ジャックの「人命救助のために働く」という言葉には何のウソもないことがよくわかる。しかし現実はどうだろうか？

現在展開されている大阪市の職員厚遇問題は、「厚遇問題」という言葉などで表現すべき問題ではなく、行政幹部、職員、市会議員、労働組合が一体となった集団詐欺的な市民だましという大問題。ジャックに「君はなぜ消防士の仕事を選んだのか？」と質問すれば、「人命救助のため」と答えるのと同じように、大阪市の職員に「君はなぜ公務員の仕事を選んだのか？」と質問すれば、「公務員と

して大阪市民のために尽くしたいから」と答えるヤツが一体何人いるだろうか？

また、「あなたはなぜこの仕事を選んだのか？」と質問されて、「日本国家のため、日本国民のために働きたいから」と答える国会議員が何人いるだろうか？

同じ質問をした場合、教師はどうか、医者はどうか、そして弁護士はどうか？

そう考えると、ジャックの「人命救助のため」という言葉がいかに重いものであるかがよくわかる。そして、そんな言葉が少なくなればなるほど、日本社会は……？

その点、ちょうど今日2005年3月31日をもって弁護士生活満31年となった私は、まだジャックと同じような「〇〇のために働く」という気持ちがいっぱい。地位や金そして名誉のために働く人生なんてクソくらえだ！

紅一点のリンダも魅力的！

この映画は消防士の世界を描くものだから、女性の登場は事実上ジャックの妻となるリンダ1人だけ。ジャックとリンダの出会いから初デートそしてベッドインはいかにも安易すぎると感じるけど、それも観客を映画の本筋に集中させるためにはやむをえないかも……？ 出会いこそ安易なものだったが、ジャックとリンダは互いに心から愛し合い、リンダはジャックを支え続け、ジャックはリンダのことを想い続けてきた。このリンダを演じるジャシンダ・バレットは『白いカラス』（03年）で注目された、スタイルもプロポーションも抜群の美人女優。『ブリジット・ジョーンズの日記 きれいなわたしの12か月』（04年）にも出演しているとのことなので、明日4月1日観に行かなければ……。彼女はこの映画の中で、紅一点としての役割を十分に果たしている。

カッコいいケネディのスピーチ

ラストのハイライトシーンはケネディのスピーチ。どんな場面でのスピーチかはここでは書けないが、やはりアメリカ社会はディベートで鍛えられているだけあって、みんなスピーチがうまい！ スピーチの下手な日本人はこういう場面からも、いかに気の利いたスピーチをするか、そしてまた人を感動させるスピーチとはどういうものかを学ばなくちゃ……。 2005(平成17)年3月31日記